

# 『落窪物語』の和歌

——法華八講との関連から——

ソノヤマ センリ  
園山 千里

## 一. 復讐から孝養へ、その道程について

私は従来から物語世界における仏事・法会という儀礼の〈場〉に注目しており、特に法会に集う「聴衆」に着目した論を展開しています<sup>①</sup>。法会とは導師と聴衆とが一体となる〈場〉であります。従来の研究では物語に描かれる法会の聴衆という視点はあまり重要視されていなかったように思われます<sup>②</sup>。私は導師・聴衆という双方への考察が必要だと考えており、主に『枕草子』をテーマとして聴衆の視点から物語の法会を捉える必要性を述べてまいりました。平安期は鎮護国家的ないわば公の仏教とは異なり、個人の信仰が隆盛を極める過渡期であります。このような情勢のなかで、仏事・法会は朝廷の儀式の中心をなし、年中行事と化します。さらには法華講などが私的に開催されるようにもなります。そのような時代状況を反映してか、物語にも仏事・法会に人々が参集する様子がみられます。

『落窪物語』には道頼の復讐終了後、孝養のため中納言への法華八講が行われます。報復と孝養との境界は非常に鮮明で、復讐から孝養へと物語が展開する、その狭間に八講が行われます。綿密な復讐を行ってきた道頼にとって、この八講は重要な意味を内包していました。この問題についてはすでに中古文学会秋季大会において「『落窪物語』の法会」というタイトルで発表しました<sup>③</sup>。今回はその発展上の発表であるため、以下簡単に整理をしてみます。報復とはいえ、過剰な道頼の言動は女君虐待という事実を知らない第三者にとっては、単なる傍若無人な理解しがたい行為であります。現にいくつかの場面で道頼の

言動を疑問視する文面がみられます。過剰な報復は道頼のマイナス面を助長して、権力の横暴を見せつける力を持っています。そのような報復直後に行われる孝養が、法会という儀礼の〈場〉であることの意味は大きいのではないかと、八講の重要性について考察をすすめてまいりました。結論としては、道頼にとって八講は従前の負の評価を払拭するため、さらなる権力誇示のため、必須の公的な行事であったのだと論じました。八講は中納言の孝養を願意として行われます。神尾暢子は、報恩について、中納言を直接の対象として社会的に面目を施すものであったと指摘しています<sup>④</sup>。たしかに表向きは中納言の孝養を全面に出していますが、道頼の従前の言動と綿密に合わせて考えてみると、内実は自らの名誉を回復させる効果的な〈場〉であり、さらには罪障の〈場〉としての役割を担わせていたと解釈できるのではないのでしょうか。特に報復は清水寺という信仰の〈場〉で公然と行われました。女君の誠めにもかかわらず、段階的に行ってきた復讐を懺悔すること、八講を復讐の集大成、終決の場として位置づけることができると思います。ともすれば道頼の性格分裂として捉えられる恐れのあった復讐から孝養への道程を、八講という「場」の特異性から注目して考察してみると、その重要性が明確になるのです。『落窪物語』は八講の作用を物語展開に上手く取り込み、巻末まで続く報恩の道程をより円滑なものにしていったのだと思います。以上の整理を踏まえて今回の発表では、その法華八講が行われる巻三の状況と和歌との関連性についてさらに考察していきます。

## 二. 『落窪物語』の和歌

『落窪物語』には総数として72首の和歌がみられます。巻ごとの和歌の数は巻一26首、巻二17首、巻三7首（ほかに屏風歌13首）、巻四9首となっています。巻一から巻四までの文章量はほぼ同等の分量ですが、和歌の数には差がみられることがわかります。以下は巻ごとの詠作者を表したものです。

巻一 道頼・女君のみ

卷二 主に道頼・女君（代作含む）。典薬助・継母

卷三 女君・四の君・三の君・蔵人の少将 \*屏風歌は詠作者不明

卷四 道頼・女君・四の君・太宰の師・面白の駒など

卷一と卷二にみられる和歌は、ほぼ道頼と女君の贈答で占められます。『落窪物語』の和歌を全体的に考察した神尾暢子は、道頼が女君にしか和歌を送付しないことについて、「男君が能動的で、女君が受動的という基本関係がある」と指摘しています<sup>⑤</sup>。また、『落窪物語』の主題を規定する要素として、和歌に注目する伊藤幸は、卷三は歌の用い方が大きく変わる巻であると指摘しています。女君と道頼との二人が一切関わらない歌が詠まれ、女君・道頼以外の歌が頻出するという変化について氏は、主題である女君の幸福獲得という立場の逆転を、散文ではなく和歌で示すことによって、物語の主題を明確にしていると述べています<sup>⑥</sup>。たしかに、卷一・卷二では道頼と女君の贈答のみで成り立っていた和歌の様態が、卷三に入ると急激に変化します。もとより卷一と卷二の段階では女君は幽閉されているため、様々な人との接触はできません。女君は卷三以降から複数の人物と和歌の贈答をしますが、一方で今まで「能動的」であった道頼からの贈答が卷三では一切みられないというのは注目すべきでしょう。唯一、卷四で道頼の歌を一箇所だけ確認することができます。父である中納言の死去にともない喪に服している女君に和歌を贈るという場面です。全巻を通して道頼は女君としか和歌を交わしません。卷二後半で女君と道頼が結ばれ、距離が近くなった二人がお互い和歌を詠まなくなるのは物語の展開上不自然なことではないかもしれません。道頼にとっての和歌は女君の心を開き、繋ぎ止めるための役割を担っていたと言えます。卷四の道頼の歌についても、服喪中ということで遠距離にいる女君を労る歌です。道頼から女君によみかける和歌は、贈答歌が本来備え持つ男女のあわい、その距離間を象徴的にあらわしているのです。しかしながら、和歌の様態だけでなく、この卷三というのは物語の転換を考えるうえで、もうひとつ重要な要素を内包しています。さきほども述べましたように、卷三は道頼による中納言家への復讐が終わり、孝養が

始まる巻です。道頼は今までの復讐を払拭するかのよう、一途に孝養に取り組みます。巻三を中心にして報恩のひとつとして行われる法華八講と道頼の和歌の不在との関連性、唯一八講開催中に詠まれる和歌について以下考えていきます<sup>⑦</sup>。特に、巻三で最初に詠まれる女君の歌「明け暮れは憂きこと見えし真澄鏡さすがに影ぞ恋しかりける」、八講中に交わされる三の君と蔵人の少将との和歌を主な対象として論じてまいります。

### 三. 報復の終了

すでに多くの先行研究がありますように、道頼からの報復は主に以下のよう  
に分類することができます。

- (1) 四の君と兵部少輔（面白の駒）との結婚
- (2) 蔵人の少将、三の君から離れて中の君と結婚
- (3) 清水寺参詣での車争いと参詣場所略奪
- (4) 賀茂祭での典薬助打擲、車の屋形墜落
- (5) 三条邸の地券争い

女君の虐待が閉鎖的な家の中で行われるのに対して、報復は公然たる場で趣向を変えて行われます。度を越す行為はときに、道頼の評判を落として、権力を思うままにする撰閑家の実態を浮き彫りにします。しかし、なぜこれほどまでに復讐を徹底化せざるを得ないのでしょうか。中納言家には女君虐待という明らかな過失があり、自らの過ちを予め内省することも可能です。現に、道頼は報復の際に女君の存在を気付かせる情報を少しずつ与えています。しかし、継母は当事者を声高に非難して怒りを噴出させるだけです。一時的に騒ぎ立てるのみで原因追及をするための深い思考には至らないのが特徴です。中納言家の不幸は女君失踪直後に頻繁に現出するにもかかわらず、その事実を受け止めることもしません。それほど虐待が日常化していたことの証しであり、女君失踪を曖昧に片付けてしまう中納言家の対応は許し難い行為であり、それゆえ道頼は徹底的な報復を遂げるのです。報復の認識がない中納言家側の視点に立っ

てみると、道頼の報復は身に覚えのない「いじめ」の類であるといってもよく、一方的に辱めを受ける被害者の立場とみえなくもありません。それは、女君が受けてきた屈辱行為の再現であり、道頼は女君がひとりで耐えしのできた苦痛を、中納言家という〈家〉単位でもって実行するわけです。虐待・復讐の場面ではそのほとんどが道頼と女君との贈答で占められ、後朝の文としての典薬助と面白の駒の歌がみられるのみです。

卷三は先にあげた(5)三条邸の地券争いから話が始まります。中納言は女君の亡き母が所有していた三条邸を修復します。しかし、中納言家が転居する前に、女君が地券を所有していることを理由に道頼は三条邸を占拠します。この一件がもととなり道頼の報復は終止符を打ちます。今までの報復が女君虐待に関与するものであるということとはどのように中納言家に伝わったのでしょうか。行方不明だと思われていた女君の存在は和歌によって明示されます。卷三以前で、女君から詠みはじめる歌というのは、自らの境遇を嘆く独詠歌を除いて、道頼との連歌による贈答しかみられません。その女君が継母所有の鏡箱の底に「明け暮れは憂きこと見えし真澄鏡さすがに影ぞ恋しかりける」という和歌を詠みます。鏡箱を手にした継母は今までの報復の正体と理由を一瞬で悟り驚愕します。鏡箱の底に和歌を書き付けるという提案は道頼が行いますが、躊躇する女君に対して、道頼は「なほなほ」と和歌を促します。女君の和歌は自発的に詠んだものではなく周囲の人間による要求があつてのことです。女君はあくまでも父である中納言を不憫に思うはかない女性であることが強調されます。道頼が女君に和歌を執筆させることは、女君の存在を相手側に認知させ、同時に報復の終了を宣言することにもつながります。この女君の和歌以来、卷三において道頼は一切和歌を詠みません。道頼の和歌がみられないのは、物語はすでに道頼と女君とを中心とする段階に突入していることを意味するのでしょうか。また、女君の存在を明示した後は、孝養という次の過程に道頼は心血を注ぎます。その成功は道頼にとって意義深い行為であるからだと考えられます。卷三に道頼の和歌がみられないのは道頼が孝養を重要視するあらわれであり、

そこに緻密な物語構成をみることができると思います。

#### 四. 法華講～捧物と手紙の贈答～

次のように道頼は女君に孝養の提案をします。

〔資料A〕 あはれ、中納言こそ、いたく老いにけれ。世人は、老いたる親のためにする孝こそ。いと興ありと思ふことは、七十や六十なる年、賀といひて、遊び・楽をして見せ給ひ、また、若菜参るとて、年の初めにする。さて八講といひて、経、仏書き、供養することこそはあめれ。さまざま、めづらしきやうにせむとては、いかなることをせむ。生きながら四十九日する人はあれど、子のするにては、便なかるべし。これらがなかに、のたまへ、せむと思さむことせさせ奉らむ

管弦や舞楽などで長寿を祝う「賀」、正月最初の子の日に春の野草を摘む「若菜まいる」の行事、八講、生前にする逆修があることを述べ、女君に「これらがなかに、のたまへ」と選択を促します。女君は八講開催の希望をあげます。孝養には後世のためにも八講が最適だと考えたのです。しかし、道頼は女君に意見を尋ねる前から八講を開催すべきと考えていたようで、「いとよく思したり。ここにもさなむ思ひつる」と意見の一致を確認しています。中納言への孝養挙行に対する言及は道頼によって何度か提言されています。どれも過剰な復讐に苦言を呈する女君への返答の際にみられます。例として三条邸での地券争いの際の文句をみてみます。転居先が三条邸であることを知った女君は、「親の嘆き給ふらむは、罪いと恐ろしく」と父中納言に対する罪の意識を抱きます。しかし、道頼は非は十分承知しているが、後に孝養すれば問題ないと返答します。後々の孝養がすべてを解決するという物言いは、それ以上の女君の発話を遮断してしまいます。道頼の行動に心を痛めながらも傍観するしかなかった女君は、道頼の所懐を十分理解しており、数多の提案の中から罪障消滅を担う八講を希望したまでのことです。

「算賀法華八講」という算賀と法華八講を組み合わせた法会の形式を採用す

るのも、道頼にとっては非常に効果的な孝養の形態であったのでしょう。報復の過程で道頼は自分の行為が原因で評判を落としています。顕著にみられるのは、賀茂祭での車争い場面で、「少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実の御心は、いとなつかしうのどかになむおはしける」と、本来は穏やかな性格であると草子地が付加する必要があるほど、世間では恐ろしい人物として考えられていたことがわかります。この事件は右大臣の耳にまで入り、「人のそしりな負ひそ」と忠告を受けます。道頼の言動は右大臣が不審を抱くほど度を超えていたのです。世間の評判となったのは、道頼が直接関与して、公の場で復讐をはじめた清水寺での一件からです。道頼の行為が女君虐待に対する復讐であることを第三者は知るはずありません。道頼の振舞は傍若無人な理解しがたい行為であったはずで

具体的には法華八講についてみていきます。物語には、「八講」という記述しなく、どのような法華八講であるかはわかりません。しかし、〔資料A〕に年老いた中納言を孝養したいとの道頼の言葉がみられたこと、八講後に七十賀が行われることから考えても、算賀に与する八講、もしくは算賀の序幕となる法会として捉えるのは自然だと思います。八講は算賀の一部として行われることが多々あります。山本信吉氏は算賀法会について、「法華経の現世応報の功德に基づいたもの」であるとして、算賀法会に八講が用いられるのは算賀をうける側の希望を反映した場合が多かったであろうと説明しています<sup>⑧</sup>。詳細は省略しますが、現に『続日本後紀』の仁明天皇四十賀の記事や『日本三代実録』にある清和天皇が母藤原明子ために行う五十賀、『日本紀略』の延喜六年醍醐天皇が父宇多天皇のために行った四十賀などによって確認することができます。盛大な祝宴を開始する前に神仏に祈りを捧げる静粛な八講は、主催者側の神仏への傾倒を表したものといえましよう。長寿を祈願・祝福する算賀にとって、法会開催は寿命祈願に最も適した祈りの場であったのです。

なかでも五巻日は会場が最高潮に達する日です。法要の中心は『法華経』「提婆達多品」の「問答」ですが、「法華讃嘆」や「経釈」は、音楽的な要素も

加わり躍動感あふれる空間を生み出します<sup>⑨</sup>。『落窪物語』には五卷日に捧物と手紙の贈答という行為がみられます。捧物とは神仏への捧げ物であり、目に見えるかたちで神仏との結びつきを認識する行為です。捧物の贈答者は、右大臣（道頼の父）・右大臣の北の方（道頼の母）・道頼の妹中の君・道頼の妹大君であるように、すべて道頼側の関係者です。また、それらの人々から八講を欠席する理由や開催に関するそれぞれの思いを綴る手紙が添えられます。

〔資料B〕

①今日だに訪ひにものせむと思ひつれども、脚の気起りて、装束することの苦しければなむ。これはしるしばかり。捧げさせ給へとてなむ

②急ぎ給ふことありとは承りしかど、のたまふこともなかりしかば。もろ心なるさまも、人見給はずやありけむ。これは、女はかくまめなる物を引き出でけると、契りを結ぶと聞き得むは

③いと尊きこと思し立ちけるを、かくなむもものたまはざりけるは、喜ぶ功德に入れさせ給はじとにやと、心憂くなむ

④今日騒がしきやうに聞けば、何ごとともどめつ。これは結縁のために

①は右大臣本人が列席できない理由を、手紙によって形式的・儀礼的に伝えます。②は右大臣の北の方からの手紙ですが、右大臣の北の方と女君は四の君と面白の駒とが結婚をする頃から手紙の応酬を続けています。今回の文面にも女君との距離を縮めようとする姿勢がみられ、積極的に八講に関わりたいと望んでいた気持ちが込められています。③の中の君の手紙は、八講開催を知らせないことに「心憂し」という表現を使い、率直な心情を吐露します。あえて否定表現を駆使する表現は、それほどまでに女君に親しみを感じている証拠でしょう。④は中宮という立場が存分にあらわれる文面です。道頼は即座にお礼の返事を中宮宛に送り、特別な配慮を行っています。このように算賀法華八講の話題の中心は捧物と手紙のやりとりであることがわかります。手紙には八講開催のお祝いと仏縁への祈願がしたためられ、形式的ながらもお互いの心情を簡潔に吐露する姿勢が見受けられます。捧物と手紙を重要視して人物間の親密さ



を表現することに成功しているのです。

## 五. 八講前後の和歌

八講の儀礼の「場」には和歌はみられません。しかし、八講の始まりと終わりの部分に和歌が存在します。三の君と蔵人の少将の和歌です。三の君は蔵人の少将と結ばれますが、四の君が面白の駒という滑稽な人物と結婚したことを理由に、義理の兄弟となることを疎い、三の君から離れていきます。その後、蔵人の少将は道頼の妹と結婚します。しかし、三の君にとっては唯一の夫である蔵人の少将です。法華八講に訪れた蔵人の少将の姿を見て、思いがけず和歌を口にします。

〔資料C〕三の君、中納言を見るに、絶えたりし昔思ひ出でられて、いと悲しうて、目をつけて見れば、装束よりはじめて、いと清げにて居たるを見るに、いと心憂くつらし。わが身の幸ひあらましかば、かくうち続きて歩き給はましも、こよなきほどならで、いかによからましと思ふに、わが身のいと心憂くて、人知れずうち泣きて、

思ひ出づやと見れば人はつれなくて心弱きはわが身なりけり

と、人知れず言はる。

和歌「思ひ出づやと見れば人はつれなくて心弱きはわが身なりけり」は、立派な装束に身を包んだかつての夫を見て、何かものを言うかと思えばそうでもなくつれない対応をされる、そのような相手を想う「我が身」の心情を嘆きます。すでに心が離れている蔵人の少将に多少の望みを託すわけですが、結局は自らの境遇を自覚してしまう歌となっています。

一方で法華八講が終わった直後の場面をみてみます。

三の君、中納言を、今日や今日やと思ひ出で給ふに、さもあらでやみぬ。  
いみじう心憂しと思ひ出づる魂や行きてそそのかしけむ、事果てて出で給ふに、しばし立ちとまりて、左衛門佐のあるを呼び給ひて、「なか疎くは見る」とのたまへば、佐、「などてかむつましからむ」といらふれば、

「昔は忘れにたるか。いかにぞ。おはすや」とのたまへば、「誰」と聞こゆれば、「誰をか、我は聞こえむ。三の君と聞こえしよ」とのたまへば、「知らず。侍りやすらむ」といらふれば、「かく聞こえよ。

いにしへに違はぬ君が宿見れば恋しきことも変はらざりけりとぞ。世の中は」と言ひて出で給へば、佐、返り言をだに聞かむと思せかしと、名残りなくもある御心かなと見る。入りて、「かうかうのたまひて出で給ひぬ」と語れば、三の君、しばし立ちとまり給へかし、なかなか、何しに音づれ給ひつらむと、いと心憂しと思ひて、返り言言ふべきにしあらねば、さてやみぬ。

三の君は八講の最中、蔵人の少将を「今日や今日や」と一途に待っていたことがわかります。そのような心理状況がつき動かしたのか、「いみじう心憂しと思ひ出づる魂や行きてそそのかしけむ」と、魂が浮遊して蔵人の少将の心を促したと物語は語ります。蔵人の少将は三の君の弟左衛門佐を呼び寄せて、三の君の近況を暗に質問します。「かく聞こえよ」と托言をした和歌は、「いにしへに違はぬ君が宿見れば恋しきことも変はらざりけりとぞ世の中は」と、三の君との決別を明確にする内容です。返信を期待させる和歌ではなく、一方的に和歌を送りつけ、自分自身の中で三の君との縁を切る自己中心的な対応の仕方です。蔵人の少将は以前から世間に対する名誉を重要視する人物として描かれています。三の君との関係も笑われ者を一族の一員としたことが原因で疎遠になっています。蔵人の少将が決別を表す和歌を詠むことについて、藤井貞和は「別れる儀式としての歌の機能」があるのではないかと指摘しています<sup>10</sup>。先にあげた文末では、三の君は「何しに音づれ給ひつらむ」と返答もできない唐突な伝言の仕方に対してひどく落胆します。蔵人の少将の和歌は今後の接触を拒否する意思表示であり、冷酷ではあるが、関係を完全に終決する役割を十分に担っています。法華八講の「場」では捧物と文のやりとりが行われました。和歌は詠まれず手紙という媒体手段によってより強固な人間関係の構築が行われます。新たな人間関係が築かれる八講という公的な儀礼の背後に隠れて、男

女関係が終焉を迎えます。非常に個人的な些細な出来事として見落としてしまいそうなやりとりです。そのような状況であるからこそ、和歌という表現レベルをあえて使用することで、その場をより象徴的に印象づけようとしているのではないのでしょうか。公的な「場」から排除されているかのように、しかしあえて背後に和歌を伴って位置づける、そのような表現で人物の位置づけを明確にしているのではないのでしょうか。このことより、特徴的な内容を伝達しようとするときに和歌という表現方法が選択されることもわかります。蔵人の少将は「かく聞こえよ」と必ず伝達せよと託けた後、和歌を詠んでいました。先に述べた鏡箱の和歌の場合も女君の存在を伝える役割を担っていました。何らかの情報を相手に一方的に伝達する時の和歌です。これらの場面から『落窪物語』が和歌と散文との差異を意識的に機能させていた一例がわかると思います。

巻三を中心にして、法華八講という「場」が持つ特殊な状況と和歌との関連性について述べてきました。物語の和歌というのは和歌だけを取りあげても意味をなさないものであり、和歌が詠まれる状況や「場」というのが重要な要素となります。今後も和歌が詠まれる「場」に着目していきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

#### [注]

- ①拙稿『『枕草子』の法会～延慶本「得長寿院供養事」との対比を軸に～』（小峯和明編『平家物語の転生と再生』笠間書院、2003年3月）、『『源氏物語』の法会と和歌～悲哀を基調とした法会の和歌～』（立教大学日本文学）2007年12月）、『『枕草子』と「法華八講」—法華八講の歴史から』（古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考』第25集、新典社、2011年3月）、『『枕草子』の宗教関連章段考—仏事の声を中心に—』（小森潔・津島知明編『枕草子創造と新生』翰林書房、2011年5月）
- ②小峯和明は文学研究の立場から〈法会文芸〉を提唱している。小峯和明「法会文芸の提唱—宗教文化研究と説話の〈場〉」（『説話文学研究』第三十九号、2004年）、小峯和明「仏教儀礼と和歌—〈法会文芸〉として」（『和歌をひらく 和歌とウタとの出会い』第4巻、岩波書店、2006年）。両論文とも小峯和明『中世法会文芸論』笠間書院、2009年に所収。
- ③『『落窪物語』の法会』（中古文学会秋季大会、2010年）
- ④『落窪物語の作品構成—道頼報復と統合論理—』（『国語国文』1989年3月）。後に『落窪物語の表現論理』新典社、2008年に所収。
- ⑤『女君作歌の表現機能—女君受動と女君主導—』（『学大国文』1988年2月）。後に『落窪物語の表

現論理』 新典社、2008年に所収。

- ⑥『落窪物語』における登場人物と和歌（「高知大國文」2004年12月）
- ⑦『落窪物語』の和歌に関する研究を以下にあげる。
- 村川和子「引歌の発生、育生期における表現技巧—伊勢物語、土左日記、宇津保物語、落窪物語を中心に—」（「国文目白」1970年1月）
- 篠原昭二「物語歌と物語の型と源氏物語」（「国文白百合」1970年3月）
- 神作光一「落窪物語の歌一首をめぐって—「踏み」と「文」との掛詞表現考—」（「和歌史研究会会報」1970年12月）
- 今井卓爾『物語文学史の研究 前期物語』（早稲田大学出版部、1977年）
- 三谷邦明『物語文学の方法Ⅰ』（有精堂、1989年）
- 新川雅朋『『落窪物語』の構成について—女君の「憂し」をめぐって—』（「中古文学」1992年11月）
- 小町谷照彦「落窪物語の算賀の屏風歌」（「文学・語学」1996年3月）。後に『王朝文学の歌ことばと表現』若草書房、1997年に所収。
- 室城秀之「物語文学の和歌をテキスト分析する—物語和歌の諸相」（「国文学」2000年7月）
- 畑恵里子『『落窪物語』の求婚歌—「いみじき色好み」から「御かどの御むすめ給ふともよも侍らじ」へ—』（「物語研究第十一号」2011年3月）
- ⑧「法華八講と道長の三十講（上）」（「仏教芸術」1970年9月）
- ⑨佐藤道子「法華八講会—成立のことなど—」（「文学」1989年2月）
- ⑩藤井貞和「物語歌に見る出会いと別れ」（「むらさき」1990年12月）

## 主要参考文献

橋本不美男「算賀と和歌」（『王朝和歌史の研究』笠間書院、1972年）、『平安朝物語Ⅲ 日本文学研究資料叢書』（有精堂、1979年）、小山利彦『『落窪物語』の構造—報復譚と出世譚を軸に—・日向一雅「落窪物語—現実主義の文学意識—」（『初期物語文学の意識』笠間書院、1979年）、三谷邦明『物語文学の方法Ⅰ』（有精堂、1989年）、佐藤道子「法会と儀式」（『仏教文学講座第八巻 唱導の文学』勉誠社、1995年）、土方洋一「いじめの構造—落窪物語—」（『物語史の解析学』風間書房、2004年）、神尾暢子『落窪物語の表現論理』（新典社、2008年）、小峯和明『中世法会文芸論』（笠間書院、2009年）、畑恵里子『王朝継子物語と力—落窪物語からの視座—』（新典社、2010年）

※『落窪物語』の引用は、室城秀之訳注『新版 落窪物語上下』（角川ソフィア文庫、2004年）によるが一部私に改めた。

※呼称については、身分地位により変化が生じるが、「女君」（継母によって「落窪の君」と命名される）、「道頼」、「蔵人の少将」、「継母」、「中納言」（女君の実父である中納言源忠頼）、「三の君」で統一した。

## \* 討議要旨

寺島恒世氏が、発表に取り上げた以外の『落窪物語』全体の和歌の機能について質問したのに対し、発表者は、巻一、二は道頼と女君のやり取りにはほぼ終始し、巻三、四は中納言の家の者たちの境遇を嘆く歌が羅列されるという全体の和歌の配置を示した上で、その機能については今後の課題とした。